

イチゴ炭疽病 [病原菌：*Glomerella cingulata*(Stoneman)Spaulding et Schrenk
Colletotrichum acutatum Simmonds]

○ 被害と発生生態

本病は糸状菌による病害で、葉、葉柄、ランナーに少し陥没した紡錘形～楕円形の黒色病斑を、高温多湿時には葉に不整形の黒色病斑を形成する。根冠部や根の基部が侵されると株全体が急激に萎凋枯死する。*C. acutatum* は、分生子多産性で葉に多数の病斑を形成し「葉枯炭疽」と称されるが、県内の主要な菌は*G. cingulata*である。

本病原菌は植物体残渣とともに土壤中で生存し、第一伝染源になると考えられる。葉、葉柄、クラウン、ランナーの病斑上に形成された分生子は、降雨や散水によって飛散し、発病株を中心に被害が広がる。本病は気温20℃以上で発病するが、低温・乾燥条件下では病徴を示さないため、潜在感染株によっても伝染する。

「とよのか」、「さちのか」を含む今日普及している品種のほとんどは、本病に感受性であるが、宝交早生は抵抗性である。

○ 防除方法

(ア) 耕種・物理的防除

- ・全育苗期間(親株床～育苗床)を通じて、雨よけ栽培と底面給水を行う。地床栽培の場合は、親株床をマルチ被覆し、エバフローを用いたマルチ下点滴灌水や、地中パイプによる灌水を行う。プランター等を用いた隔離栽培も有効である。
- ・健全な親株から採苗し、発病ほ場からは採苗しない。
- ・発病株の早期発見に努め、発見した場合は早急に処分する。
- ・灌水には地下水等を使用し、過度な灌水は避け、葉柄基部に水滴を長時間溜めない。
- ・苗の切り離し時は、土や病斑でハサミを汚染しない。
- ・窒素肥料の多施が発病を助長するため、施肥量は適正に保つ。

(イ) 薬剤防除

- ・親株床、育苗床、本ほは、クロルピクリン剤、ダズメット剤等で土壤消毒する。本ほは太陽熱消毒も有効である。
- ・予防散布が重要であるため、薬剤散布は最高気温15℃を目安に3月中旬頃から始める。
- ・山口県内の広範囲でベンレート水和剤、アミスター20フロアブルに対する耐性菌が発生しているため、炭疽病を対象とした防除には使用しない。



萎凋・枯死株



ランナーの病斑



炭疽病の分生子